

## ヘーゲルの有機体論の存在論的性格

### ——ヘーゲル『大論理学』とカント『判断力批判』の差異——

川瀬 和也

#### 序

本稿では、ヘーゲル『大論理学』の「生命」章の中の、有機体と合目的性について論じられている箇所を取り扱う。当面の目標は、そこでの議論をカントの『判断力批判』と比較しながら、その射程を示すことである。これによって、有機体と合目的性をめぐる議論がどのような広がりを持ち、他のどのような箇所と関連しているのか、その大まかな照準を定めることが可能になるはずである。

問題の箇所が、『判断力批判』と緊密な関係を持つことは明らかである。『判断力批判』の第2部「目的論的判断力の批判」においても、有機体と合目的性の関係が論じられるからである。カントとヘーゲル両者の叙述は、「有機体」と「合目的性」という素材が共通しており、類似点多々見受けられる。しかし素材が共通であるがゆえに、カントとヘーゲルの哲学の性格の違いが際立った形で現れる箇所だとも言える。本稿では、ヘーゲルの論理学における「生命」論の位置づけを探求する作業の一環として、このカントの有機体論との比較を主題とする。そして両者の議論を比較することで、カントの認識論的な議論の枠組みを踏み越えることで可能となった、ヘーゲル独特の論点を際立たせる。

具体的には、まずはカントの『判断力批判』における有機体論が、有機体の外に主観的な理念としての「全体」を見出すものであることを見てゆく(1)。次に、ヘーゲル『大論理学』における有機体論をたどり、それが有機体に内在的な魂の「否定的統一」へと到達することを明らかにする(2)。こうして鮮明になった議論を基に、両者の議論が「内的合目的性」の規定において対立していることを明らかにし、カントの認識論的な議論をいわば「ネガ」として、へ